
I Love Me

ハミユル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I Love Me

【Nコード】

N7396Y

【作者名】

ハミユル

【あらすじ】

何もかもが嫌になり、睡眠薬を図り自殺を図ろうとした時のことだった。

不審なメールが届き、突然部屋が光り輝くと信じられない存在が目前に現れた。

キャラクター紹介（前書き）

「Rainbow Memory」と「carillon」と「G ame」の連帯作品です。

キャラクター紹介

おおぞら あれん
大空愛恋

白銀髪に黒眼の背中までのウェーブ。

内気な上にマイペースで人見知りが激しい。動植物が大好き。

手先が器用で、物を作るのが得意。最近再び天使が見えるようになった。

成績は低く運動も不得意で、国語が得意で英語と世界史と科学が苦手。部活は探し部。

アレム

ウィラエル部隊所属の上位男性天使。白銀髪に碧眼の癖毛ショート。

クールで少々短気な部分もあるが、根は優しく真面目。頭の回転が速く直感も鋭い。

実はお笑い番組が好きで、時々寒いギャクを言うことも。

愛恋が生まれた時からずっと傍にいる守護天使。

カーミュ

プレディエル部隊の中位男性天使。金髪に緑眼の癖毛ショート。

のんびり屋でおしゃべりが大好き。意外と博識でマニアックな本が好き。

実はお酒が入ると壊れる。絵がとんでもなく下手。

愛恋が生まれた時からずっと傍にいる守護天使。

サルシヤス

ジュナエル部隊所属の上位男性天使。茶髪に茶眼の癖毛ショート。

クールで生真面目。サルと呼ばれると憤慨する。

左腕に包帯を巻いており、パソコンに興味があるが苦手。

愛恋が生まれた時からずっと傍にいる守護天使。

キャラクター紹介（後書き）

亀並みの更新ですが、完結できるように頑張ります

第一話 不思議なメール（前書き）

「Rainbow Memory」と「carillon」と「G
ame」の連帯作品です。

第一話 不思議なメール

手元にある、白く小さな紙袋に入った大量の睡眠薬を虚ろな目で見つめ、躊躇すること無くパッケージを次々に開けていく。

無表情のままプラスチックフィルムを押し破り、中から錠剤を取り出して黙々と片方の掌に乗せていたその時だった。

隣に放置していたサファイア色の携帯電話からオルゴール音が鳴動すると、メールが届いた事を告げる。

無視をしようかと悩むけど、まあどうせ最後だしと思いながらメールを開く。

するとそこには、度肝を抜かれるような文章が綴られていて思わず目を丸くした。

『自殺するのは構わないが、死んで楽になると思ったら大間違いだぞ。大空愛恋』
おおぞら あれん

啞然としたまま暫く画面に表示されているメールを凝視していると、震える手で送信者の名前を見つめる。

そこには英語でエンジェルと記述されていた。

一体誰の悪戯よ。

しかもこんな状況で、このメールだなんて悪趣味だ。

するとまた携帯電話が鳴動して、背筋が寒くなりながらも、怖いもの見たさに再び新着メールを覗いて見る。

『お前は今、視界が狭くなって自己本位になっているぞ。死がどういう事かよく思考してみるんだな。高校生のお前なら少しはわかる筈だろう？ 大空愛恋』

不気味なメールだ。

もしかするとこの事態を、見知らぬ誰かが何処からか覗いているのかもしれないと思考して、思わず辺りをきよろきよろとする。

けれどこの部屋の窓は全て締め切っていて、外からは見えないように青いカーテンもしてある。

とてもじゃないけど、部屋の様子を見ることは不可能に近い。

唯一例外として、監視カメラが考えられるけど、この部屋にはそんな物は無いと断言出来る。

何故なら、この部屋は家族以外は誰も出入りしたことが無い部屋だから。

それに今は密室状態で私以外は誰もいない。となるとやはり唯の偶然か、もしくは悪戯メールの可能性が高い。

でも唯一腑に落ちないのが、メールに書いてあった私の名前だ。

一字一句間違えること無く、しかも正確に二度も書いてあったんだから、気になるのも無理は無いはず。

次第に「どうして、私の名前を知っているわけ？」と問い質したくなり、むくむくと興味が沸いてきて、試しに相手に返事を書いてみることにした。

やっぱり、謎を解決してから眠るように逝きたいし。

試行錯誤しながら短い文章が出来上がり、正体不明の相手に返信を出す、意外な事にエラーメールとして帰って来たことに一驚する。しかもエラーの内容は、相手のメールアドレスは存在しないだって。

……一体どういうこと？ かなり不気味なんだけど。

当然の如く相手に届くと思っていたので、再び携帯電話が鳴動してメールが届いた時は、自然とさっきよりも薄気味悪さが増し表情が

強張る。

『有難いが俺にメールを送っても無駄だぞ。さつきから俺の正体を知りたがっているようだが、それなら送信者名に表記してあるだろう？ 当然信じないだろうが、俺としては一向に構わない。ただ今は、お前がしているその情けない面を殴ってやりたいだけだ』

「……………えっ?!」

驚きと戸惑いを込めた叫声だった。

無理も無いわよね、送信者の相手があの純白の翼を生やした天使だと言っているんだから。

頭可笑しいんじゃないの？ この人。当然信じないけど。

このご時世だし、天使ですと言われて「はい、そうですか」と素直に信じる人なんて誰もいないってば。馬鹿らしい。

それにしても殴ってやりたいだなんて、物騒なことを言う奴ね。

するとこれで四度目になる、天使からのメールが届く。

『さて本題に入る。まず左手に乗せている睡眠薬を捨てろ、もうお前には必要の無いものだ』

このメールを見て確信した。どうやらこの状況を天使とやらは何処からか観ているらしい。

一体どうやっているのか不明だけど、もうこの際どうでも良くなり始めてきた。

これさえ飲んでしまえばそんな事とは無関係になるんだし、この世ともおさらば。

そして思考した末に携帯電話の電源を切ることにした。

最後に正体不明の天使さんから、厳しくも暖かいメールを貰ったことに感謝しよう。

携帯電話をベッドの脇に置いて、左手に乗せてある三十錠余りの睡

眠薬に視線を向ける。

次第に背筋に冷や汗が流れ始めて、心臓が早鐘を打ち始めた。正直うるさい。

後悔なんてないんだから。こんな世界。

それから口を大きく開けると、意を決して一気に睡眠薬を放り込もうとしたその時だった。

突然、目が黄金色の光に包まれると、余りの眩しさに吃驚しながら顔を両腕で構えるようにして目を細める。
ボクシングの守りに似たポーズだ。

何?! 一体この光は何なの?!

それと同時に部屋に突風が吹き込み、青いカーテンは激しく揺れて、服や机上にあつたルーズリーフも吹き飛び、次第に物が散乱して足の踏み場が無くなっていく。

幾分かして徐々に突風と眩い光がおさまり始めると、恐る恐る瞼を開けて腕を下げた瞬間だった。

信じられない人物を目の当たりにして、これ以上無い程に目を最大限に見開く。

同時に顎が外れそうなほど大きく口を開き、驚愕しつつそれでも必死にどもりながら言葉を紡ぐ。

「てっ……ててて……天使?!」

「ご名答」

「ほっ……本物? ほっほほ……本当に天使なの?! 証拠は?!」

「背中に翼があるが、それは証拠にならないのか?」

天使は面倒臭そうに、眉を潜らせて答えた。

「疑う気持ちもわかるが少しは信用しろよ。それに今は俺の正体より、自殺を考えているお前の方が先決だろ?」

「うつ……」

目前の美形天使はニヤリと口元で笑みを浮かべて、透き通った蒼い眼差しを細めると冷やややかな視線を向けた。

目は口ほどに物を言う。

少し怒気を含んだ眼差しからは、見て取れるようにかなりご機嫌斜めの様子。

口元の笑みは消え、整った顔は無表情のまま眉間に皺が寄せられている。

まるで蛇に睨まれた蛙のようで、私は目前の人物の引き込まれそうな蒼い眼を緊張しながら見つめ返す。

綺麗な蒼い眼だわ、サファイアみたい。

心理的に威圧を受けているのか、どういうわけか目を逸らせない。もしかして、あの蒼い目に不思議な力が有るのかなと疑問に思う。そのくらい人を魅了させて、虜にさせてしまう神秘的な目だ。

物が散乱した部屋に、暫く重い空気と沈黙が続く。

張り詰めた空気の中、少しでも動くと言が響き渡りそう、遠慮勝ちにゴクリと唾を飲み込む。

幾分黙っていたら、次第に重い空気と沈黙に私は耐え切れられなくなり、勇気を出して疑問に思っていたことを口にした。

「あつ……あの……もしかして私、死んだの？ だから迎えに来てくれたとか？」

天使の眉毛がピクリと一瞬吊り上がると、呆れ果てた表情を浮かべて冷たく言い放つ。

「誰がお前なんかの為に迎えに来てやるか。時間の無駄だ」

見掛けはクールで親切そうなのに、案外言い草が厳しい天使だ。

皮肉で意地悪な台詞に内心腹を立てていたら、急に天使が私の左手から睡眠薬を奪い取り、白い布を纏っていた袂の中に放り込んだ。

まるで塩を撒くような動作に度肝を抜かれていると、天使は純白の

翼を広げて一度羽ばたく。

すると、空気のようにふわりと宙に浮いて、散乱した部屋の中でもまだ綺麗なベッドの上に長い足を組んで腰掛けた。

それにしても無駄に身長が高いし、手足も長ければ容姿端麗過ぎると思う。

言っちゃ悪いけど、トップクラスのモデルでも到底太刀打ち出来ないわ。

だってそれほど非の打ち所が無い相手に、完璧過ぎて逆に気持ち悪いくらい。

上には上がいるものね。まあ天使だからと言われれば納得出来るけど。

しかし今のこの部屋の有様といい状況といい、特に天使は中でも厄介で家族に見つかったら大騒ぎされる事は間違い無し。

この家は無宗教だけど、どういうわけかお父さんもお母さんも妹も皆揃って天使が大好きだからね。

家に天使のオブジェはたくさんあるし、各部屋にも飾ってある。

だから余計に不味いなと思っていると「それで？」と言う天使の声で、現実引き戻される。

「お前はそんなに死にたいのか？ メールでも書いたが死んで楽になると思ったら大間違いだぞ。特に自殺は止めた方がいい。それにお前が仕出かそうとしている自殺方法では、そう簡単には死なないぞ。おまけに苦しい上に後遺症付きだ。それでも構わないと言うのなら俺はもう引き止めはしない。俺にはそんな権限も無いからな。さつき奪った睡眠薬も返すし、あとはお前次第だ。どうする？」

天使は一気に撒くし立てると、ニヒルな笑みを零した。

第一話 不思議なメール（後書き）

亀並みの更新ですが、完結できるように頑張ります！

第二話 感触（前書き）

「Rainbow Memory」と「carillon」と「G
ame」の連帯作品です。

第二話 感触

「……何故そこまで、引き止めようとするの？」

「誰でも自殺を仕出かそうとしている者を見れば、問答無用に止めるだろう？　ましてや俺はお前の守護天使だ。簡明だろう？」

「守護天使？　よく人間を護つてると言われているあの？」

「そうだ。守護天使は老若男女を問わず必ず一人は傍についている。役職は主にガイドで、その他にも諸々とある。そういうわけで、俺はお前が生まれた時からずっと傍にいたぞ。これから先もお前が死ぬまで見守る予定だ」

「なるほど。じゃあさっきのメールも全て、あなたからだって言うの？」

天使は「当たり前だろ」と呟き、呆れた視線を送ってくる。

「まだ本来の死期じゃないパートナーを助けるのも、仕事の一環だからな。本当は姿を現す予定は無かったが、今回のように緊急時のみ特例で許されている。まあお前のように生れつき、俺達の姿が見える子供は例外だけだな」

「……えっ？　何それ？　私はあなたに出会うまで天使なんて見たことが無いわよ？　それに存在すら信じていなかったけど？」

「信じようと信じまいと関係無い。お前は物心がつく前に、確かに俺達の姿を見て話していたぞ。ただ忘れていただけだ。今俺が姿を現したことで、再び能力が目覚めたんだろうな」

そんな記憶全く無い。微塵も無ければ欠片も無い。

でも物心つく前なら無理も無い。

寧ろ忘れていた方が当然で、毎日の暮らしの中で自然と記憶が蓄積されて埋もれてしまっていたのだろう。

天使の台詞に暫く啞然としてみると、部屋のドアから数度ノック音

が響いて、仰天しながら慌てて天使に隠れるように促す。

「誰か来たわ！ 早くロフトでも良いから隠れて！！」

けれど天使は、動揺の欠片も見せず何故か平然としており、ただじつとベッドの上で、相変わらず長い足を組んで落ち着いていた。

一体どういうことなんだろう。

「まあ見てろよ」

面白げに天使は、口角を上げてにやりと笑うとドアに視線をやる。すると二つ年下の妹が部屋に入ってくると、目を丸くして仰天していた。

私は硬直して冷や汗を浮かべながら、引き攣り笑いを零す。

もう駄目だ。天使がこの部屋にいるってばれるし、一気に家族に噂が広がってしまう。流石にそれだけは避けたかったけど。

そう意中だと思っていると、妹は険しい表情を浮かべながら、天使のせいで散らかった部屋を見て大声で述懐する。

「お姉ちゃん、まさかこの部屋に空き巣でも入った！？」

「……へっ？ そっ……そんなわけ無いじゃない！！」

私は首を激しく振って、慌てて否定した。

空き巣じゃなく、天使なら入って来たけど。しかも現在進行形で、ベッドの上に堂々と座って笑みを浮かべているし。

「だったらいいけど、あーもうビックリした。ちょっとは片付けなよ。こんなに汚れたお姉ちゃんの家を見たのは初めてだからさ」

「もうわかったから。それで何の用事？」

「あっそうそう忘れてた。少しでいいから、ハサミを貸して欲しいんだけど。学校に忘れてきちゃって困ってるんだ」

「はははっ」と妹は照れ笑いを浮かべると、私は小さく溜息を吐いた。

ルーズリーフが散乱したフローリングを転ばないように歩きながら、机の一番上の引き出しの中にあるハサミを取り出して、妹に手渡す。

そこで気になっていたことを白銀髪の天使には悪いけど、恐る恐る実験の意味も込めて妹に聞いてみることにした。

「あのさ、例えばだけど……こうベッドを見て何も思わない？ いつもとここが違うなーとかさ。何でもいいんだけど」

「おーい。大空愛恋の妹、俺の声が聞こえるか？」

思わぬ天使の笑声に、ぎょっと目を最大限に見開きながら狼狽する。

次第に心臓が早鐘を打ち始めて、自然と表情が強張り始めた。

けれど妹は何処吹く風で、それ所か普段と変わらず明るい口調で話を続ける。

「……いつもと同じで綺麗じゃない？ 他に何かあるわけ？」

妹の反応に目を丸くしていると、慌てて両手と首を振る。

「あつ……ううん。別に何も無いのよ。答えてくれてどうもありがとう。ほらほら早く自分の部屋に戻って」

「……変なお姉ちゃん」

これ以上不振がられないように、妹の背中に手をやってそそくさと部屋から追い出してドアを閉める。

緊張の余りそのままドアに背中を預けて、力無くずるずるとその場に座り込み同時に溜息を吐いた。

危なかったわ。

そしてそのまま美形天使に視線を移すと、「ほらみろ」と笑みを含んだ眼差しで、首を傾けて満足気に破顔する。

なんかちょっとむかつく。

「俺の言った意味がこれで解っただろう？」

「どうやら私以外には、あなたの姿や声は誰にもわからないようね。こっちは心臓が破裂するかと思ったけど」

鋭い眼差しで天使を睨みながら、嫌味つたらしく言い放つ。

けれど天使は気にする所か、憎たらしく真っ白な白い歯を覗かせてニツと笑っているだけだった。

まるで悪戯小僧の作戦に引っかけた気分を味わって、内心腹を立てる。

すると天使はポーカーフェイスになり、話題を元に戻した。

「だったらもうこの件はいいな。随分と話が逸れたが、結局お前はどうしたいんだ？ 生か死どちらを選ぶ？」

「……わからないわ。あなたのせいで計画が狂ってしまったんだもん。さつきまで死のうとしていたのに、あなたと出会ってから、どういうわ

けかそんな気になれない。あれだけ酷いことされて、精神も心もズタボロになったはずなのにね」

思わず天使に苦笑を向ける。何でさつき出会ったばかりの天使に、こんなことを話しているんだろうと自嘲的になりながら。

まあそれは彼が、私の守護天使だからつても関係しているのかもしれない。

天使はベッドを降りると、ゆっくりと歩いてきて正面に屈み込む。

どういうわけか穏やかな暖かい眼差しを向けていて、その時初めて天使の微笑を浮かべた。

綺麗な笑顔に無意識に見惚れていると、彼は嬉しそうに告げる。

「わかっているじゃないか。死を望んでいる者が、俺にメールを送ったりしないだろう？　ましてや携帯電話のメール自体見ないはずだ。お前

は生きたいんだよ。生きたいから行動を起こしたんだ」

その台詞を聞いた途端、私の中で風船が割れるように何かが弾けて、両目から少し灰色がかった透明の大粒の涙が溢れ視界が歪んでゆく。少しでも動いたら零れ落ちそうな涙を袖口で拭おうとしたら、足元に踏んでいたルーズリーフに染みを作った。

一粒。二粒。三粒。

寒くも無いのに小刻みに震えながら、ゆつくりと雨のように零れ落ちる涙を拭くと、まだ暖かさが残っていた。

そこで気になっていた事を、私は震える涙声で天使に問う。

「何で私、悲しくも無いのに泣いているの？」

天使は私の胸を指差すと、暖かい笑みを向けながら答えてくれる。

「お前の魂が震えながら泣いているんだ。恐らく嬉しいんだろう、お前が生きて決意したから」

その途端、涙腺が壊れたように次々にルーズリーフに染みを作って

いく。

私は何とか泣き止もうと無理に笑顔を浮かべるが、まるで無意味だった。

涙腺は滞ることを知らず、頬を濡らしてそのまま重力に従い、ただ下へ落ちていく。

悲しくも無いのに涙が勝手に溢れ出ずまは、少し変な感じがした。ふいに天使が大きな手を躊躇しながら頬に触れてくると、すぐに違和感を覚える。

それは感覚が全く無いこと。

人間同士なら当たり前のようにある、あの肌の感触が、目の天使からは全く感じられ無くて驚愕する。

姿形は人間のようにくつきりと確かに目前にいるのに、触れ合えない事に不思議さを感じさせた。

まあ人間じゃないし、架空の存在と言われるほどだから何処と無く納得は出来るけど。

「あなたの手の触覚が、全く無いわ。どういうこと？」

「当たり前だ。俺達は人間の三次元用の肉体が無いからな。物にも触れ無ければ人にも触れられない。住んでいる次元が異なるせいだ」

「そうなの？　かなり不便じゃない？」

「いいや、不自由は無い。ドアや壁はすり抜けられるからな。でも今は、お前の涙を拭えないことが少しもどかしい」

「あなた……」

頬にあつた大きな手が離れてゆくと、次は頭上へ移動して、まるで頭を撫でられているかのような錯覚に陥る。

確かに残念ながら感触は無い。

けれど、その行為自体がとても嬉しくて、心の奥底がじんわりと暖かくなりとても心地良い。

次第に壊れたと思っていた涙腺が、漸く涙を止める作業に入つたのか少しずつ落ち着き始める。

「俺の事は気にせずにたくさん泣けよ。涙は心に溜まっていた腐敗物を外へ洗い出し、ストレスを解放する働きがあるからな。それに癒しの効

果もある。泣いた後スッキリするのはそのせいだ」

「……うん」

涙にそんな効果があるなんて知らなかった。

いつも泣いたら負けと思っていたせいかな、ここ数年どんなに悲しく

ても、必死に耐えてきたから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7396y/>

I Love Me

2011年11月27日15時56分発行